The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイツ語授業とコンピュータ、この20年
Author(s)	力武, 京子
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2013, 14, p. 43-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドイツ語授業とコンピュータ、この 20 年

乃武 京子（言語文化研究科　言語文化専攻）

はじめに：NeXTstation 時代

私がネットで結ばれたコンピュータ環境を授業に使うようになったのは、1991 年マッキントッシュの教室内 LAN を当時の勤務校で使ったのがはじめてである。外部とも接続されたネット環境を使ったのは 1993 年、現在の大阪大学サイバーメディアの前身の一部である旧情報処理教育センターが学内に 338 台の NeXTstation を接続して教育的利用に供した時がはじめてである。

今でこそコンピュータは単なるコモディティと化して、コミュニケーション手段としてはスマートフォンにその地位を譲りつつあるとすら言えるが、1993 年当時の NeXTstation は処理能力が高く、またグレースケールの表示画面が大変美しく、多くの学生がそれに夢中になった。中でもメールとチャットの機能は学生にとっては誘惑ですらあったと思う。実際に NeXTstation にはまって留年した学生もいたと言う。それゆえ NeXTstation を使った授業を提供すると、定員の 2 倍、3 倍もの受講希望者が殺到したものであった。授業中「内職」をする学生もいたが、多くの学生が私の提供する今考えれば貧粗な教材に真面目に取り組んでくれた。

ポートフォリオによる学生とのやり取り

私が非常勤のドイツ語教師として勤務し始めたのは 28 年前の 1985 年からである。それ以来、私は現在に至るまで一貫して「学習者とのコミュニケーションを大切にする」ことを特別に重視して来た。具体的には、「ポートフォリオ」（「チェックシート」とも呼ぶ。）と称する B4 の紙を配り、毎回授業のポイントをまとめさせ、さらに数行のドイツ語作文か書き取り問題を課した。その際質問や授業に対する要望があれば書き込むようにさせた。ポートフォリオは添削して翌週返却した。

ほんの数行でもドイツ語でポートフォリオを書かせてみると学生の理解していない点がわかる。たとえば、主語 ich を英語のように文中でも Ich と頭文字を大文字で書く、句読点を行末ではなく行頭に打つ(!)、名詞の頭文字を小文字のままにしているなどという最も基本的な間違いをおかしている場合はできるだけ早く間違いを発見し、矯正するようにしてきた。また、私の話し方が速すぎる、板書が読みにくいなどという苦情にも対応するようにした。むろんすべての要望に応えたわけではないが。

NeXTstation を使っていた時代も手書きの「ポートフォリオ」は毎回提出させた。それと並行してドイツ語に関する質問等をメールで受けるようにした。当時一週間に学生から受けるメールの数はせいぜい 10 通から 20 通であった。

2013 年度前期授業

私は 1998 年以降、健康上の理由で通算 6 年間休職しており、CALL 教室を使った授業から遠く離れていた。しかし 2012 年 4 月から再び CALL 教室を使った授業に挑戦している。2013 年前期は、2 年生の「地域言語文化演習（ドイツ語）III」および 1 年生の同科目 I において CALL 教室（豊中教育棟第 1、第 2 教室）を使用した授業を行っている。

その様子に関して報告するのはスペースの都合上別の機会に譲るが、アウトラインだけを述べる。

まず、1 年生の授業では、テーマを「ベルリン」に絞り、ベルリンに関連した教科書を使い、街を DVD を使って見せたり、インターネットを使って実際にその風景を学生用のセンターモニターに写しだして見せる。それだけでなく、学生自身にも実際にドイツのウェブサイトにアクセスさせて調べさせている。バスや電車の時刻表、カフェやレストランのメニューも実際にアクセスして調べさせる。Google Maps を使えば、特定の住所の界隈を写真で見ることもできる。（これは方向音痴の私自身が街を歩く時愛

用している手段である。)

他方2年生の授業では、上記のような利用に加えてドイツの海外放送ドイッチェ・ヴェレ(Deutsche Welle, 以下DWと略す。)のウェブサイトを教材として使っている。まずはDWのその日のニュースを少し見た後、DWが提供している多様な教材の中から中級レベルの学力が必要なUnterrichtsreihen(授業シリーズ)を選び、今学期は「ベルリンの壁崩壊」というテーマを扱った。この教材は壁の成立から崩壊までを記述するだけでなく、画像や音声情報も含み、インタビューを見たり壁の作られるさまを動画で追ったりした。ベルリンの壁を突破しようとして建物の上のほうの階から命がけで飛び降りる人、それを受けとめる西ベルリンの人々、敷かれつつあった鉄条網を軍服のまま銃をかついで飛び越えて西に逃げる東の兵士、日々積みあがって行く壁の両側で泣きながら別れを惜しむ家族、このような歴史的映像は学生に非常に強いインパクトを与えたようだ。また、1970年代に東独でデビューし、今なお活動しているロックバンド"KARAT"の「7つの橋をこえねばならない」のライブの模様を紹介して、当時の若者の抑圧されつつも決して希望を失わない姿を、学生も感動をもって追体験してくれたようだ。

「ポートフォリオ」での学生たちの感想をみると、学校で習ったことのない歴史上の出来事を知ることができて感動した、というものが多かった。

2年生の授業で良かったと思うのは、教材がネット上にあるため、関連事項を深く広く追いかけることができることであった。途中でわからない問題に遭遇した学生が私あてにメールが来ることもあった。

2年生の授業では機械翻訳の使用も「ドイツ語 › 英語」の場合にのみ許可した。ドイツ語から英語への自動翻訳を使えば、だいたい何が書かれているかぐらいは理解できる。

今日のサイバー事情と「隙間学習」のすすめ

NeXTstationの時代から20年。コンピュータは飛躍的に進化し、処理能力はほぼ1000倍に発展し、メディアはどんどん速くそして小さくなった。その中で最も著しく変化したのはコンピュータを介したコミュニケーションの量ではないかと思う。

インターネットの普及とともに膨大な量のデータを得られるようになっただけでなく、コミュニケーション手段がメールと掲示板だけでなく、Twitter, Facebook といったソーシャルメディアまで広まり、その量も劇的に増えた。

2010 年あたりからインターネットに接続できるスマートフォンが急速に普及し、今や学生の大半がスマートフォンを所持するようになった。iPadなどの携帯端末の使用者もこの1-2年の間に増えた。

2013 年前期に私があるクラスでとったアンケートによると学生の76%(19名)がスマートフォン、16%(4 名)がフィーチャーフォン(従来の携帯電話)、5名がiPadを所持していた。(有効回答数25、ふたつ以上のメディア所持者もあり。)

私がここで目をつけたのが学務情報システムKOAN、授業支援ソフトWebCT(2013年度からCLE)の機能をスマートフォンや携帯電話に結び付けることであった。今の学生の多くはスマートフォンやコンピュータにまさに「依存」した生活を送っている。その点をドイツ語教育に利用しようと考えたのである。KOANにおける私の掲示はパソコンで見られるだけでなく、学生の登録している携帯またはスマートフォンに転送される。授業関連ブログもスマートフォン等で常時アクセス可能である。通学電車の中で、授業の合間になどちょっとした「隙間」にスマートフォンを使って学習してもらってはどうだろう?

終わりに

スマートフォンやタブレット端末の普及により、授業用のウェブサイトや世界中のデータにも常時アクセス可能になり必要とならば教師にも授業時間に関係なく学習を相談できる今日、学習者は動機さえあれば、以前とは比べられないほどの学習の機会を与えられているのである。

今年度の授業ではメールや「ポートフォリオ」による質問のほか、学生とのTwitterやFacebookを通じた交流も生じている。これらを授業に利用する方法についても今後考えて行きたい。